

ミュージアム・レター

Gakushuin University
Museum of History

Museum Letter No.6

発行日 ● 平成20年(2008)3月15日

もくじ

- ごあいさつ1
- 男爵を知るなら「明治を創った人々 from男爵物語」展へ1
- 御裳捧持者と御下賜時計2
- 「さよならピラミッド校舎&ウルトラセブン上映会」レポート3
- 平成19年度新収史料よりご紹介4
- 催し物のお知らせ4

学習院大学史料館 第28回特別展 「明治を創った人々 from男爵物語」

会期：平成20年4月7日(月)～6月7日(土)
開室時間：平日12:00～17:00 土曜日10:00～12:00
*日曜日・祝日・5月15日(木)は閉室
特別開室日：4月13日(日)10:00～16:00 5月24日(土)10:00～14:00
会場：学習院大学史料館展示室(北2号館1階)
入場無料
協力：(社)昭和会館

1. ごあいさつ

学習院大学史料館では、平成20年(2008)4月7日(月)から6月7日(土)まで、第28回特別展「明治を創った人々 from男爵物語」を開催いたします。本展覧会は、明治国家の建設に大きな役割を果たした男爵にスポットを当てたもので、日本の近代史を考えるひとつの試みとなっております。

本号では、この特別展に関連する記事、およびピラミッド校舎見学会のレポートを掲載いたしました。本レターを通じて、当館の展示や活動を身近に感じていただければ幸いです。

(館長 神田龍身)

2. 男爵を知るなら 「明治を創った人々 from男爵物語」展へ

高潔なイメージの「男爵」、私たちにお馴染みの「男爵いも」など、「男爵」という言葉を耳にされたことがある方は多いと思います。しかし、「男爵とは？」と改めて問われると、なかなか明快に答えることができないのではないのでしょうか。

明治17年(1884)7月、五爵位(公爵・侯爵・伯爵・子爵・男爵)の制定により、男爵という華族階級が生まれました。男爵たちはいくつもの団体を創立し、貴族院議員として国政へ参加、帝国議会で指導的役割を担い、昭和22年(1947)に華族制度が廃止となるまで、500家の男爵はその責務を果たしました。

現在、男爵の団体として活動するのが社団法人昭和会館です。昭和会館の伝統文化委員会は男爵の歴史と文化を次世代に伝える活動を行っています。学習院大学史料館は同委員会からのご支援を受け、4年の歳月をかけて、『昭和会館80周年記念 男爵物語』(全3冊・平成19年9月)を刊行しました。そして、この度その成果を特別展「明治を創った人々 from男爵物語」として公開いたします。

この展示を通して、男爵と日本の近代史について理解を深めていただくと同時に、明治を創った人々の熱いメッセージを感じていただければ幸いです。

*「男爵いも」の名前は、男爵川田龍吉が海外から導入したじゃがいもに由来します。

(野尻泰弘)



▲「男爵物語」の購入を希望される方は学習院大学史料館事務室にお問合せください。頒布価格1セット16,800円

3. 御裳捧持者と御下賜時計

—「明治を創った人々 from男爵物語」展より、この一品—

「御裳捧持者」は、新年の宮中儀式に際し、皇后、皇族各宮妃殿下の洋装大礼服「マント・ド・クール」の裾を捧持した少年たちのことです。

三島由紀夫の小説『春の雪』には学習院在学の華族の子弟が御裳捧持を務める様子が以下のように描かれています。

「お裾持の小姓の服は、膝の下まで届く半ズボンと上着がそろいの藍の天鷲絨地で、胸の左右に四対の大きな白い鞠毛がつき（注・実際には五対）、同じふくよかな白い鞠毛が左右の袖口にも、ズボンにもついていた。腰には剣を佩き、白靴下の足には黒エナメルピロードの釦留めの靴まりげを穿いた。白いレエスのひろい襟飾りの中央に、白絹のタイを結び、大きな羽根飾りのついたナポレオン風の帽子は、絹の紐で背へ吊られていた。華族の子弟のうちから、成績のよい子だけが二十人あまり選ばれ、新年の三日間、かわり合って、皇后のお裾は四人で持ち、妃殿下のお裾は二人で持つ。」（『春の雪』新潮文庫より）

明治国家の西欧化政策の一つに各種制服職服の洋装制定がありました。明治4年（1871）、岩倉具視使節団訪英の際に、洋風の大礼服を初めて着用し、翌5年には国内においても公式に洋服が礼服に採用されるようになりました。

一方女子服制は明治17年に定められました。皇后は同年1月17日に女子服制に関する「思召書」を下賜され、洋装化決定の方針を明確に後押しされました。「思召書」では公式儀式が洋式となるに伴い座礼から立礼へ変化することから、洋装の方が立礼に適し、身体の動作歩行に便利であることを説かれました。しかし「殊に注意すべきは勉めて我が国産を用ひん



マント・ド・クール姿の山階宮菊麿王妃範子殿下
（『女子学習院五十年史』より）

の一事なり、若し能く国産を用ひ得ば傍ら製造の改良をも誘ひ、美術の進歩をも導き、兼て商工にも益を与ふること多かるべく…」と礼服調製に関しては国産を用いることを奨励しています。

明治20年の新年宮中儀式から皇后は、洋装大礼服「マント・ド・クール」をお召しになるようになりました。

これにともなって、御裳捧持は明治22年より学習院在学の華族の子弟が拝命することとなり、以来昭和19年（1944）に至るまで56年間執り行われました。儀式に際して、少年たちは左のような衣装を着用し、儀式終了後には皇后より懐中時計のご下賜がありました。

写真は紀俊行氏。俊行氏は男爵紀俊忠氏の長男、昭和8年（1933）学習院中等科2年在学中に奉仕。時計は直径4cm、精工舎製。

（長佐古美奈子）



4. 「さよならピラミッド校舎 &ウルトラセブン上映会」レポート

ピラミッド校舎に迫る侵略者プロテ星人、そして地球を守るウルトラセブン。

これは特撮番組「ウルトラセブン」の第29話「ひとりぼっちの地球人」(1968年)の一場面です。学習院大学は京南大学の設定で撮影地に使用され、ピラミッド校舎(中央教室)や北1号館など、いくつかの建物が登場しています。

「ピラ校」の愛称で呼ばれるピラミッド校舎は、日本を代表する建築家前川國男氏の設計により昭和35年(1960)に竣工しました。しかし、老朽化のため解体が決定したことから、平成20年(2008)1月12・13日にお別れ見学会を催し、13日にはピラ校で「ウルトラセブン」の上映会が行われました。当日は、「ひとりぼっ

ちの地球人」の監督を務めた満田^{かずほ}裕氏をお招きし、撮影当時の様子をお話いただきました。「全てが見どころ」と語る満田監督のお話は、「ウルトラセブン」への深い愛情と自信が感じられ、ピラ校を埋め尽くした多くの来場者を魅了しました。

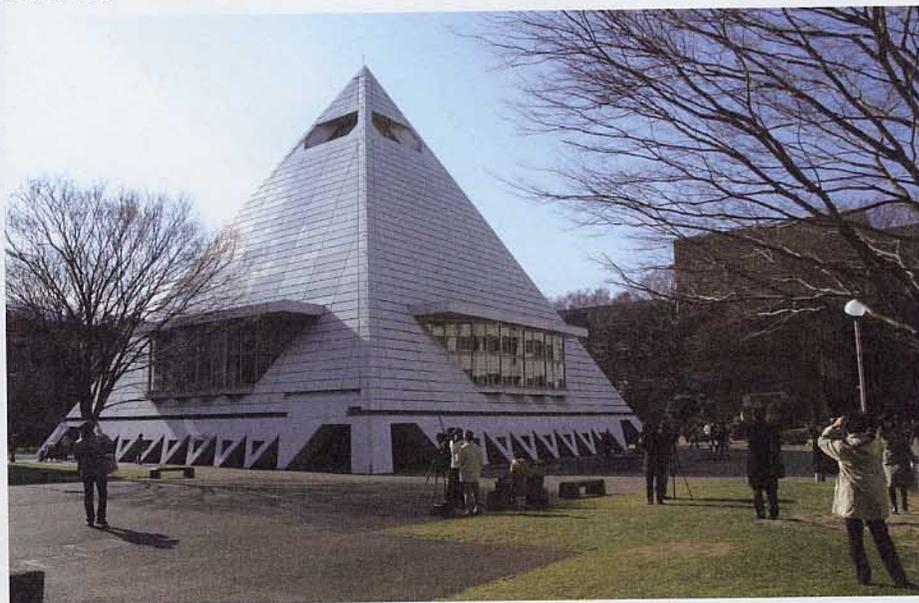
このイベントは、事前に新聞・テレビなどで報道され、インターネットでも話題となり、当日は厳しい寒風にもかかわらず、2,000人余の来場者を得て、盛会のうちに終了しました。ピラ校は、これまで私たちに数多くの思い出を与えてくれましたが、最後にまた大きな話題を提供してくれたと言えるでしょう。

なお、今年の夏からは、「目白キャンパスの100年」展(仮)を開催し、9月には「ウルトラセブン上映会&トークショー」を行う予定です。皆様のご来場をお待ちしております。

(野尻泰弘)



満田 裕 監督



ピラ校を撮影する見学者



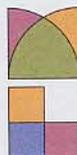
会場風景(みんなで決めのポーズ)



ウルトラセブン ©1967円谷プロ



ピラ校とプロテ星人 ©1967円谷プロ



5. 平成19年度新収史料よりご紹介

平成19年度も各所より史料のご寄贈・ご寄託をいただきました。その件数は18件にのぼります。皆様に深く感謝の意を表するとともに、今後も引き続きのご好意をお待ち申し上げます。今年度は「新収資料 高松宮家展」の開催に伴い、皇室関係の史料のご寄贈を受けました。ここでは皇孫(のち皇子)傅育官を務められた^{やとみ}弥富氏からの寄贈史料をご紹介します。

^{やとみはまお}弥富破摩雄氏は傅育官として明治45年(1912)から、のちの昭和天皇・秩父宮殿下・高松宮殿下のご教育にあたりました。当時三皇子殿下はご両親(大正天皇・貞明皇后)から離れてお住まいであったので、身の回りのことを含め、いろいろなことをお教えるのは、傅育官の役目でした。

写真の昆虫標本は金属製。生きたままの昆虫をご存知ない三皇子殿下にお見せするために作らせたとのこと(ご子息談)。標本はセミ・タガメなど7種15点。「仁丹の煉歯磨」の箱に、添書きとともに入っていました。(セミの大きさ4.5cm)

下の写真は貞明皇后からプレゼントされたカメラを、弥富傅育官の頭に乘せて遊ばれる昭和天皇と秩父宮殿下。

(長佐古美奈子)



●史料件数全21件。平成19年6月6日受贈

6. 催し物のお知らせ

第55回 史料館講座

映画上映会「筆子 その愛—天使のピアノ」
(男爵渡辺清の娘、石井筆子の生涯について)

講演：大阪教育大学准教授 二井仁美氏

日時：平成20年5月24日(土) 14:00~17:00

会場：学習院創立百周年記念会館1階正堂

*映画・講演ともに入場無料・事前申し込み不要です

ミュージアム・レター第6号

2008年3月15日発行

〒171-8588

東京都豊島区目白1-5-1

電話 03 (3986) 0221

内線 6569

FAX 03 (5992) 9219

Gakushuin University Museum of History

学習院大学史料館

● ホームページもご覧ください

<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua>